

Title	The art of history (J. B. Black. 1926)
Sub Title	
Author	山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.4 (1926. 11) ,p.160(620)- 161(621)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0160">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0160</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書評

## The Art of History (J. H. Breck. 1926)

今日、科學及び學問の範圍に於ける特殊化、及び分化作用の結果として、史學も、又他の自然科學及び知識學の各部門と同じく史學そのもの、發展の爲めに、完全なる自由と獨立とを要求するに至り、政治學、倫理學、神學等より次第に遠ざかつて來たが、これと同時に、史學が、これまで社會の教化生活に於て有して居つた一要素を失はんとしてゐる。

即ち、往時一般の知識階級の間に行はれたる史學が、今や、特殊研究家に依つて特殊研究家の爲めに書かれるやうになり、史學の爲めの史學といふ語まで生ずるに至つたのは、實に學問の爲めに慶賀すべきことであり、一つの大いなる進歩たることは申すまでもないが、それと同時に、歴史學の視野が餘りに狭くなり、細事にわたり過ぎ、單なる好古癖に墜ち、人類歴史の方向、及び意義、又は大いなる時代の精神等を見失ふ傾向あるは惜しむべきことである。といふのは、歴史家の過去に對する洞察力は、彼が、現在の世界に就いて有する知識の深さに依つて、條件づけられることは、止むを得ないことだからである。

一體、歴史的事象は、その性質上、直接に、絶対に知られるこ

とは、極めて稀で、多くの場合、ある見地より、比較的に間接に知られるのが常であるから、或る程度までは、主觀分子と、實踐分子とを含有することは避け難いことでもあるし、のみならず、これを斥けるよりも、却つて、これを有効に處理する所に、又歴史家の技倆が存するのだと思ふ。

十八世紀、又は十九世紀頃の偉大なる歴史家は、ランケや、スタンプでも、一方に於て、飽くまでも嚴格なる、批判的、純客觀的態度を持しながら、他方に於て、各々斷乎たる自己の見地に立つて、大膽に彼等の標準と、批判とを、あらゆる時代に、人間に及び事物に適用してゐる。そして、これが最近の科學的歴史家に於ても見られないやうな、深みと、實質とを、彼等の作物に與へてゐる。今日、餘り協同力作を重んじ過ぎる結果、個人が非常に低下したることは明かである。従つて前代の遠大の計畫をなしたる大家に對して、少し冷淡すぎはしないであらうかと思はれる。

勿論、前代の歴史家は、今日の歴史家に比すれば、多くの點に於て、不充分は免れ難いとしても、彼等に就いて最も貴重なることは、彼等は彼等の時代の全體の教化を過去に適用したといふ一事實である。これが、即ち彼等の作物をして不朽ならしめたるものである。兎に角、研究法は別としても、唯歴史の技術、即ち歴史の書方とかいふ點よりすれば、今日の學者は、彼等の史觀に學んでも決して損はなからうと思ふのである。

本書は實に十八世紀に於ける偉大なる歴史家、例へば、ヴォルテール、ヒューム、ロバートソン及びギボン等の理想を、歴史術の見地より、批判的に、及び同情的に吟味討論したるもので、同

時に本書の序論に於て、此の種の文學的哲學的學派の理想と、現今の史學者間に一般に行はれてゐる抱負との主なる相異を鮮明にされてゐる。而して本書の全論文に一貫したる著者の立論は、即ち文學、哲學、及び歴史の緊密なる結合といふことであつて、これが唯に十八世紀だけの理想に止らずして、あらゆる時代に妥當すべき理想であるといふのである。

要するに、本書の主旨は、哲學と歴史の再結合を要するといふのであつて、然も今度は、哲學の方からよりも、寧ろ史學の方から結合が企てられねばならぬといふのである。そして、今日の歴史界には、此の試みが爲さるべき充分の余地が存するといふのである。

私は實に同感であつて、これは胸襟を開いて傾聴すべき議論だと思ふ。突差に書き出したので、充分著者の意見を紹介し得なかつたことは、著者並びに讀者諸賢に對して誠に濟まないと思ふ。

(山本光郎)

## 土俗私考

(中山太郎著  
板本書店發行)

最近、我國土俗に關する研究が大いに展開せられ、各種の研究書が公刊せられて來たのは、土俗に興味を持つ者の等しく欣喜する處である。本書は閑話叢書の一で、土俗學の旗頭として知られて居る中山太郎氏の近著である。自分は、今春四月阿波に旅行の節、東京驛の賣店でこれを求め、車中の本として面白く讀了した。それで次に本書の内容を極く簡単に紹介したいと思ふ。

元服の土俗と性の問題——我國太古より元服(成年式)の土俗は行はれ、その標式として割禮が施され、この「事が、標式の中心となつて居つたやうで、この風習は、既に、醫學、民間傳承學、古學の三方面より證明されて居るが、未だ土俗學方面より論議されて居らぬので、氏は其の專攻の同方面より、現に「體裁禪祝ひ」の儀式として殘つて居るものを擧げてこれを證明された。

性に關する迷信——これは更に、七難のそと、月のさわり、七夕祭は性的神事、双胎兒を殺す迷信、最も露骨なる迷信、各地に行はれた〇〇市、神の申し子、清少納言の末路、農業と性的祭り、根強き性の迷信とに分けて、興味深く説述せられた。この中「清少納言」の末路に於て、稀世の才女も、老後は都より阿波の里浦村に退いたが、この部落の姥櫻も、村の漁人には天女のやうに見えて朝夕執念深くつけ廻はされ、清女は遂に自ら與仁を挾りとり、之れを海中に投じて死んだ。これ、その海よりは、清女の與女に酷似した(貝恰)貝が捕れると。又同所の海濱近くに、清女の遺骸を葬つた、尼塚と云ふ丈近くの寶篋院塔がある。自分は今春阿波旅行の節、其所に立寄つたが、著者の説明通り、下の病にかゝつた男女の滿願奉納の腰布が、いと華かに巻きつけられて居た。案内の村人の談によると、尼塚は天塚で、承久の亂によつて此國に遷幸遂に崩じ給うた土御門天皇の御火葬塚で、毎歲開天皇崩御の日には、村民は、その傍の草薙にお籠りをし、又終夜盛んな參詣の人があるといふ。又一説には、この塚は、允恭天皇の十四年秋九月、天皇淡路島に獲を催せられた時、鳥神に捧げる珠をば、海底より獲て死んだ、海人男狭磯の墓とも言ひ傳へられて居